

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2015.9
第67号

二階特別展示室にて企画展「藩政期の秋田」を開催中です。
前期展示は9月23日（水）まで。どうぞご覧ください！

棟木に謎の箱が… 中身はあの英雄の書状？

今年度の公文書館講座は、八月二十八日のアーカイブズ講座(第二回)をもって終了しました。たくさんのご参加、ありがとうございます。今回は、解読講座第三回「郷土資料をよむ」から、「渋江和光日記」に登場する話題です。

* * *

文政十二年(一八二九)六月、渋江和光の家臣・駒野目六兵衛に書状が届きます。差出は角館の組下給人・河原田新右衛門で、近いうちに一泊で久保田に出府したいという旨を伝えるものでした。

さて、この書状に「我等へ為見候様ニとて」ある書付の写しが入っていました。それによると、会津松平肥後守様(松平容敬)の領内池田村に惣兵衛という百姓がおり、「御年貢已ニ闕所ニ相成」家財を取り払うことになりました。すると、棟木に一つの箱が。中には一包の証文が入っており、次のような内容だったというのです。

養米借用之事

一 此度北狄海へ渡為養米と粟七斗借用候、若帰国無之候節八時之將軍へ可願裁断もの也

伊予守

源義経判

文治四年

武蔵坊

四月十八日

弁慶加判

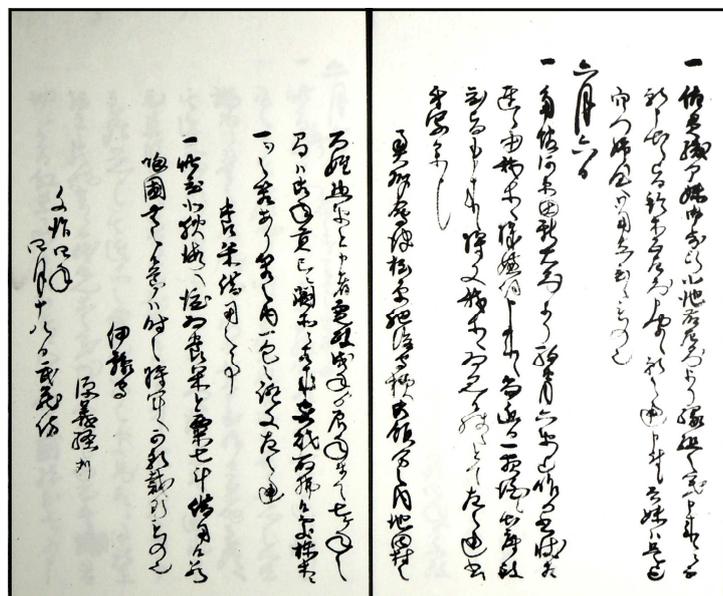
筆者 亀井六郎

池田村

惣兵衛との

文治四年といえは西暦一一八八年。源義経が藤原秀衡のもとに身を寄せた翌年です。すでに秀衡は亡く、この年二月には義経追討の宣旨が出されています。翌文治五年(一一八九)、秀衡の子泰衡の襲撃を受けた義経は、衣川でその生涯を終えます。

しかし、実は義経は生きており、蝦夷島(北海道)に渡ったとする説が「義経北行伝説」です。この伝説、江戸時代には広く流布しており、惣兵衛の家から見つかった証文はそれを裏付けるかのような内容です。



「渋江和光日記五八」(A二八九—三二九—五八)より、文政十二年六月六日の記述。

さて、この証文は会津の役所から幕府へ提出され、惣兵衛は江戸に呼び出されます。そこで何が言い渡されたのか？ 続きは公文書館刊行の「渋江和光日記」第七巻で読むことができます。企画展にお出かけの際は、ぜひ閲覧室でご覧になってみてください。

古文書こぼればなし

伊勢参宮の道中風景

〜介川東馬の御代参記録から〜

伊勢信仰は神明信仰として最も広く民間に浸透した信仰だと言われ、殆どの村や町に勧請されて神明社が建立されています。江戸時代の人々は「お伊勢講」を組織し、代表が代参と称してお伊勢参りに旅立つのが常でした。

秋田藩では、五年ごとに伊勢神宮への代参を行うのが恒例になっていたようで、伊勢に近い大坂詰の藩士がこの任にあたっていました。文政十年（一八二七）、当時大坂蔵屋敷詰役であった介川東馬が代参を命じられ、代参を済ませたその時の記録が残されています（AH二九二―四四五）。東馬（緑堂）はこの時期勘定奉行兼銅山奉行で、大阪蔵屋敷留守役でもあり、勘定方としても重要な任務を負っていました。

いよいよ三月十一日に出発します。御館入（大坂商人、藩との取引商人）達は暇乞と称して前日に来訪し、酒を飲み、暮などをして旅立ちを祝います。当日は早朝蔵屋敷を発ち、大坂からの伊勢参りの基点である玉造稻荷神社へ参拝します。参宮の者、見送りの者などでごった返し、「けしからずにぎにぎしき事なり」とあります。天気も快晴、東馬以下代参一行十六人は元気に出発します。この日は八里歩いて、奈良へは夕方五時頃着。宿は参宮の者で大取り込み、近年にない参宮の多い年であるといえます。

古文書倶楽部 第67号 (2015年9月号)

翌十二日は早朝より東大寺の大仏など、奈良

の古跡を見物します。奈良を出発し、初瀬（はつせ）へ夕方五時頃着き観音を拝観します。桜は盛りで早や満開、絶景なり、とあります。初瀬へ一泊。

十三日早朝出発。山道ですが、相変わらず参宮の人多く、揃いの着物で伊勢音頭を唄いながら通る者達もあり、十六七の娘で鼠色の揃いの合羽、ビロード襟、手甲脚絆が見事に華やかな五人組、婆の娘孫を連れた者、三宝荒神・二宝荒神（馬の乗り方）にて馬に乗った者、垂れ駕籠に乗る者、思い思い色々であります。

街道両側の茶屋には、何講と染め上げたもの三四十本ばかりひらひらと掛け、往來の者を呼び込む茶屋女の声、雀のさか子を打つようどとあります。「お休みなさりませ」「湯も沸いております」など声々に、旅人を無理無理と引込み、突きつけ逃げる者もあり、誠に面白い光景だといえます。今夜は阿保泊り、大勢の客の湯へ行く物音が夥しく、自分の湯は別風呂ですが、簾一つ隔てた隣の湯へは男女二三人ずつ一緒に入る様子。湯の中では「お前さん何処でござります」「私は播州（兵庫県南部）でござります」「何日にお立ちなされましたの」などと高々と話声、種々現在にも通ずる風景であります。

十四日は難所の阿保峠を越えます。昨夜の雨の故か桐油合羽、笠傘を持った者もあって誠にはかの行かない歩き方です。峠を下った所で、泣いている女の子と出会います。年は十二、播州からの仲間十八人にはぐれたとのこと。色々慰めの言葉をかけ、菓子や餅、銭なども与え、新しい草鞋を履かせるなど親切な介抱の結果、

ようやく泣き止みます。やがて三里ばかりの所に十四五の男の子が待っています。いずれも十二より六七の者達の様子、雨で悪路を難儀しているようでした。

今日は松坂泊まり。雨で道悪く、六軒茶屋で日暮となります。松坂への伊勢本街道で雨が晴れ、月が出て道もよく松坂の宿大和屋へ八時頃到着します。宿泊の者三百人。座敷々々は爪も立たぬよう也とあり、混雑ぶりが伺われます。

翌十五日は快晴で、明ヶ半頃松坂を出発します。伊勢への本街道なので参宮の者の往來夥しく、若い者、合羽・浴衣、袴纏の揃いの者たち、また揃いの胴乱・合切袋を下げたグループなど皆「ヤアとこせい」と声を合わせ、笠で通りを葺き詰めたような様子だと表現しています。

伊勢へ到着すると宮川の手前に迎えが出、久保倉太夫家まで案内されます。久保倉太夫は御師と呼ばれる御祈祷師で、伊勢神宮のような大社は全国に御師を派遣し、信者を集め集団で参詣させるなどして信仰を普及させたといえます。秋田での御師は武家を久保倉太夫家、一般領民を三日市太夫次郎家が担当し、毎年暮れには「伊勢曆」と「御札」を配布するのが恒例となっています。この夜は久保倉家へ宿泊し、御祈祷・神楽、お払いなどで代参を済ませます。翌日は内宮・外宮を参詣し、代参の役を滞りなく済ませます。夜は古市に泊まり、話の種として伊勢音頭を一見したと書いてます。古市は元遊里で賑わっていた所ですから、さぞや羽をのばしたことでしよう。

【嵯峨稔雄】